



吉村 真奈

医学科
放射線医学分野
教授

東京医科大学卒業
東京医科大学博士課程
博士（医学）
2015年より現職

研究を続けられた モチベーション

子どもを育てながらの勉強や研究は確かに大変な作業ですが、一方でそのことが研究を続ける上での原動力になったようにも思います。子どもを連れて実家に戻っていましたが両親からのバックアップを全面的に受けてフルタイムで仕事をしました。昨今のような子育て支援制度はありませんでしたが、子どものいる女性医師は一人きりでしたので、かえって周りのスタッフの配慮に恵まれました。子どもを見てくれる友人にも助けられました。たくさんの人に援助してもらった分、きちんと仕事をしたいという気持ちも強くなったように思います。同級の女性医師は20名余りいますが、ほぼ全員が働いています。愚痴や苦勞話は全く聞かれませんが、それぞれに刺激を与えてくれます。

研究テーマ (一言でいうと)

核医学という分野で、放射性物質を含む薬剤を用いて病気の治療を行う「アイソトープ治療」の最適化の研究をしています。中でも、放射性ストロンチウムを用いてガン末期の患者様の骨転移による疼痛を緩和し、生活の質をより向上させることを目指しています。

大変だったこと

夫も多忙な医師であったので、すれ違いの生活が続き離婚となりました。二人の子どもを自分ひとりで育てないといけないという覚悟は厳しかったです。子育て中は勉強や研究の時間のやりくりはもっぱら睡眠時間を削るという以外にはなく、また、周りのスタッフが留学や研究を進めていくなかで、後輩にも置いていかれるような感じがして辛かったです。そんな中、3か月の期間をもらってイギリスに留学しました。留学と言ってもほんの短期間でしたのでいくつかの施設を見学して廻るに留まりましたが、それでもすばらしい出会いや発見に恵まれ、国内で仕事を続けていく覚悟と自信ができました。焦りだけが大きくなっていましたのでね。

研究の魅力、これからの夢

ストロンチウム治療を受けるのはガン末期の患者様ばかりです。精神的にも肉体的にも苦しい時間のなかで提供して下さった貴重な情報やデータを無駄にすることはできません。より高い効果をあげるために解決すべき問題はまだまだたくさんありますので、そのうちの一つでも解明して臨床に還元したいという強い気持ちで研究を続けています。また、現在、不安のなかで生活しておられる患者様の痛みに寄り添いながら、丁寧におつきあいしていくことも大切だと考えています。また、若いときには教育が苦手でした。何かすごいことを教えなくては…という気持ちが強かったのかもしれない。現在は学生と共に思考する教育を心がけており、思考訓練としての画像教材の作成にも力を入れたいと思っています。

知りたいことがいっぱいある 一つでも解明して 臨床に還元したい

未来の女性研究者への応援メッセージ

挫折した時は自分のせいにしないで

子育て支援制度はできましたが、女性医師の増加とともに受け入れるコミュニティにも限界が出てきています。最終的には各々の誠実さと譲りあいの中でしか解決できないことを忘れないでください。また、仕事の中断を余儀なくされた場合も自分に力がなかったと自分を責めないでほしいです。現状では仕事を続けられるかどうかは、本人の能力以上に周囲の環境に左右される場合が殆どです。自分に与えられた目の前の仕事を誠実にこなしながら次のステップを待ってほしい。放射線科では、子育てをしながら自宅のPCで画像診断研修を続け、いずれ研究再開へ繋ぐといった勤労形態支援にも力を入れています。

